簒奪者の夜

玖鴎燎助

時刻は午前2時、草木も眠る丑三つ時である。昼の日の下では賑やかな街も、この時間になれば自然と喧噪は消え失せる。ほんの僅かな営みだけが、眠りに落ちた街の中で静かに続いている。

そんな中、銀行の前に車を乗り付けた二人組の男達もまた、眠る街の中で行われる、あまり褒められない営みに勤しもうとしていた。

◆　◆　◆

「時間確認、マルフタマルサン。復唱！」

「二時三分でしょ。俺の持ってるのは電波時計なので確認とか必要ないっすよ」

「バカモノ！こういうのは形が肝心なんだ、形が！これだから若い奴は……」

路肩に駐められた黒いミニバンの中で、中身のない会話をする二人組の男。片や黒のタートルネックと綿パンツ、黒いスニーカーを履いた、造形は良いが頭の悪そうな顔の男。片や目と鼻と口の部分に穴が空いている黒い全身タイツを着た、見るからに頭の悪そうな男。

カジュアルな見た目と、噴飯物な見た目。二人の服装は全く違う趣ではあるが、その目的としているところは同じ。要するに『見つかりにくい格好』である。こんな時間にこんな場所で、こんな格好の人間がすることと言えば、ただ一つ。

「歳は一つしか違わないじゃないですか。なんですか『自分は慣れていますよ』的な言い方しちゃって」

「何を言うか、歳一つ違えば十分だろ！大体なんだその格好は。もうちょっと夜に紛れやすい格好をしたらどうなんだ！」

「先輩はもう少し人の社会に紛れやすい格好してください」

「……何、その『紛れるような格好しないと人の社会にいられないよ』的な言い方は」

――そう、ただ一つ。今まさに彼らは『強盗』をしようとしているのである。

「……で、これからどうするんですか？銀行強盗って、あんまり深夜のイメージないですけど」

「うむ。大抵の銀行強盗は昼日中にするだろう。金とかは基本的に奥とか地下とかの金庫に仕舞われているだろうし、一番奪いやすいのは営業している時間だろうしな。セキュリティを破るよりは人を脅す方がよっぽど楽に決まっている」

「じゃあなんでこんな夜中に？」

「ふっふっふ。敢えて、だよ」

不適な笑みを浮かべながら得意げに言い放つ全身タイツの男。すごいことを言っているよう

で、あまり中身がないのはご愛敬である。
その事を身近にいて心得ているタートルネックの男は、適当に「へぇ」と相槌を打つと、その先の説明を催促する。特にたいした作戦を用意していないことは了解済みである。
「とりあえず俺は金庫を見たことがない。だからまずは目視するとしよう。心配はするな、見たことはないが開け方なら心得があるのだよ。そういう知識も持たずに強盗をする奴はバカだからな。あっはっは」
そう言って、金を入れるために持ってきた大きめの鞄から聴診器を取り出す全身タイツ。なるほど、確かに知識を持たずに強盗を目論むのは馬鹿の所行である、とタートルネックは思った。思ったが口にしないのは優しさなのか憐れみなのか。
「多分今時の銀行の金庫は聴診器じゃ開けられないと思いますよ」
「何……だと……？だったら何で開けるんだよ」
「少なくとも、聴診器で音聞いたら開けられるような作りにはなってないと思いますよ」
全身タイツの落胆の程が見て取れる。前時代的にも程がある。よほど聴診器に自信があったのだろう。どこで手に入れたかは知らないが、きっと小躍りして喜んでいたに違いない。
と、僅か数秒で調子を取り戻した全身タイツは、手に持った聴診器を無言で後部座席に投げると、次なる策を提案した。
「ならば次善策だ。最近の銀行は金を取り出す機械があっただろ。なんて言ったかな？あれは確か……ＢＢＱみたいな」
「一文字もあってないじゃないですか。ＡＴＭですよ、現金自動預け払い機です」
「あー、それだそれ。そいつ諸共に現金を奪おう。あの中にはたんまりとお金が入っているはずだしな」
全身タイツにしては割と考えた作戦である。が、一つ、というか根本的な問題がある。
「この車の何処に入れるんですか？　結構大きいですよ、ＡＴＭ」
そう言って助手席と運転席の両者が同時に後ろを見る。およそ泥棒をしようという雰囲気を一片たりとも感じさせない、荷物が散在する後部座席。タオルケットやダンボール、果てはアイドルのポスターやらトンファーまで積まれている。最早意味が分からない。
普段から使っている車とはいえ、もう少し整理して欲しいものだ。そもそもナンバープレートを隠すという大切な配慮も欠く有様なのだから、これほど間抜けな強盗もそうはいない。
そんなごった返した車内の様子に、さしもの持ち主も「あー……」と呆然とする他ないようである。最終手段としてはサーフボードよろしく車の上部に括り付けるのも可能ではあるだろうが、いくら夜中でもそれは目立ちすぎだ。往来の場所で「私は強盗です」と宣伝して回るようなものである。
全身タイツは、顎を手でさすりながら思案し続け、突然天啓を得たかのような得意げな顔をすると、これまた得意げな色を滲ませながら言葉を発した。

「機械ごと奪うのが無理なら、中身だけ掻っ攫おう。ＡＴＭを壊して中にたんまりと詰まった札束を……」
じゅるり、という擬音が似合いそうなほど欲に眩んだ表情を浮かべる全身タイツ。目と鼻と口しか見えないのに表情が分かるのは、タートルネックの長年の付き合いからなのか、或いは全身タイツが単純な顔なのか。
「壊すのはいいですけど、どうやって？」
タートルネックの当然の質問に、全身タイツはやや困ったような顔をしながら答える。
「えっと……殴る蹴るなどの暴行を加えてだな……」
「殴る蹴るなどの暴行でＡＴＭを壊せるなら、格闘技出た方がよっぽど稼げますよ」
分かっていたはずの考え無しの解答に、呆れかえるタートルネック。
そんなタートルネックの落胆を知って知らずか「駄目かなぁ」と呟きながら、空に向かってへなへなと力無いワンツーパンチをする全身タイツ。それで怯むのは遊園地にいる着ぐるみだけである。
「ならばあれだ。このまま早朝まで待機して出勤してきた銀行員を脅して金庫を開けさせようではないか。これは中々な妙案だろう？」
ドヤ顔でのたまう全身タイツ。今までの策の中では一番現実的ではあるだろう。それはタートルネックも思ったが、合理的な方法ほどタイミングが合わないのが世の常である。
「……先輩、明日は定休日です」
「……」
「……」
その後も、ミニバンの中ではああでもない、こうでもないと侃々諤々の議論が白熱した。ただし、終ぞ議論に中身は無かったが。
その末に、タートルネックが、この際諦めてしまおうなどと零して全身タイツが本気の平手を繰り出したり、それに対してタートルネックがこめかみにカウンターを喰らわせたり、逆上した全身タイツとタートルネックが狭い車内で取っ組み合ったりしている間に一時間近くの時間が過ぎた。
息を切らせながら睨み合う二人。こんなことをしている暇はない、とようやく気付いた二人は、どうにか落ち着こうと二度、三度と深呼吸をする。
「はぁ……はぁ……で、どうします？」
「……だ」
「はい？」
「出たとこ勝負だぁ！」
眠気で混乱したのか、或いは使い慣れない頭のオーバーヒートで前後不覚になったか。どちらにせよ考えることを放棄した全身タイツはハンドルを握り、ミニバンのフロントを銀行に向

けると、全力でアクセルを踏みしめた。
「マルサンサンサン、復唱ぅぅぅ！」
「ぎゃあああああっ！」
唸るエンジン。砕けるガラス。響く絶叫。飛ぶ意識。
暴れ回る車内の荷物と、砕け散るＡＴＭ。風に舞う紙幣は紙吹雪のように、簒奪者たちを覆い尽くす。
見事ＡＴＭの破壊に成功した二人（内一人は気絶）は、鞄の中に紙幣を突っ込むと、奥から走り寄る警備員を尻目に、車体の凹んだミニバンで夜の街を遁走する。全身タイツの事前の計画は見事瓦解したが、その結果として強盗は成功。ある意味スマートなその犯行は、およそ計画性とは解離したものであった。

◆　◆　◆

「いやぁ、見事成功したな」
「……これって成功なんですか？」
とある四畳一間、二人の男が酒を酌み交わしていた。片やビールを片手に上機嫌、片やチューハイを飲みながら若干途惑った風である。
上機嫌な男の手に握られているのは、とある人気アイドルのライブチケット。しかもＳ席、要するに最も金額の高いチケットである。見るからに稼ぎのない男が持つにはおよそ分不相応なチケットである。
「ふっふっふ、遂に……遂に間近で見られるんだ！苦労した甲斐があったってもんだ！」
「車内にあったポスターの子ですよね。そんなことの為に強盗なんて……」
「そんなことってなんだこの野郎っ！」
殴りかかる男にカウンターを決めるタートルネック。
強盗成功から約二十八時間。現在時刻は午前の七時半である。テンションの高さは徹夜と酔いによるものなのは言わずもがな。昨夜の喜び冷めやらぬ内の宴会だ。
稼ぎも蓄えもろくにない男にとって、アイドルの追っかけは真綿のように男の首を絞めていくものだ。だがその真綿は、皮肉なことに男の生きる糧にまでなってしまっているのだから、余計に質が悪かった。
そこで、男は大学時代の後輩を半ば強引に引き入れて強盗を計画したのだ。最も、その計画は即座に頓挫と相成ったわけであるが。
後輩も後輩で、遊ぶ金欲しさに乗っかってきたのだから、男のことをとやかく言える立場ではない。
そんな浮かれ調子の二人の耳に、チャイムの音が鳴る。

「ん？ 誰だこんな時間に」
「いや、時間は別に普通ですけど」
ほろ酔いの男が、覚束無い足取りで玄関まで行くと、鍵を開けて来客を招き入れた。
「どうも初めまして。これは貴方のですよね？」
玄関口に立っていたのは、スーツ姿の男性。その手に持っていたのは、あまりにも似つかわしくないピンク色のカード。それを見るやいなや、スーツの男からひったくるように手に取ると、まじまじと眺めた後に、ほろ酔いの男が口を開いた。
「確かに、これは間違いなく私のファンクラブ会員証です」
なんてものを落としているんだこの人は。
「あの、失礼ですがこれをどこで？」
「えぇ、車で数分の〇〇銀行というところです。つい先日強盗事件のあった」
なんてところに落としているんだこの人は。
スーツはそう言い終えると、胸から何かを取り出した。真っ黒な革製のカバーに金色に輝くエンブレム。およそ多くの人間が「警察手帳」として認識しているものである。
「監視カメラに映っていた、不届きな車のナンバーから特定した名前とも一致しました。詳しい話がお聞きしたいので、署までご同行願えますかな？ちなみに拒否権はございませんので、あしからず」
そういうスーツ姿の後ろには、警官が数名控えている。逃げるのは不可能らしい。
ほろ酔いの男も頭が冴えたらしく、大事そうに持っていたチケットをぽろりと落としてしまった。まさかの急転直下な展開である。
タートルネックの男はというと、どこか達観した風に手に持っていたチューハイを飲み干すと、次からはもう少し上手くやろう、と思った。
最も、次があればの話ではあるが。